



## 第34回 ブナと狩人の会

# マタギサミットinただみ開催

第34回「ブナ林と狩人の会 マタギサミットinただみ」が6月24日から25日にわたり、開催されました。本サミットは同実行委員会と只見町の共催で開催されました。北海道、秋田県北秋田市阿仁、山形県小国、長野県栄村秋山郷など日本を代表する雪深い山々の猟師を中心に、研究者、学生、行政担当者など全国から200人を超える参加者がユネスコエコパークに登録された只見町に集合し、狩猟、採集など、中山間地域の生活や文化継承について語り合い、情報交換を行いました。

24日は季の郷湯ら里を会場に講演等が行われ、冒頭の挨拶で渡部勇夫町長は、豊かな山との暮らしをゼンマイ折りの思い出と共に語った他、原発事故以降続く一部山菜の出荷制限などについても触れました。また野生鳥獣肉については「只見ふるさとの雪まつり」の定番だった熊汁が提供できなくなっている。制限が続くことにより伝統的な文化の継承や発展の危機を招くことのないよう、町としても対応を考えるのに貴重な機会を

### 講演

#### 「旅マタギと只見町、近世中山間地域のイノベーション」

いただいた」と話しました。

主宰の田口洋美氏（狩猟文化研究所所長）の講演では、

秀でた猟技術を持ち、各地で出稼ぎ狩猟をしていた秋田県阿仁の旅マタギと只見町について解説しました。阿仁マタギの家には、只見町黒谷川流域の狩場を描いた絵図が残っていることや、阿仁マタギが遠く越境して只見町を訪れていること、その記録が叶津番所の当主、長谷部家の古文書に残っていることなどが紹介されました。

田口氏は「山と生きるマタギも農村社会の一員であり、江戸後期から明治、大正、昭和という時代の変化に伴って、税制改革や毛皮の需要増などの影響を受ける中、クマやカモシカなどの資源を換金する仕組みを工夫し、狩猟を市場経済に結びました。マタギ達の歴史は、現在の中山間地の

経済を考える上でも、学ぶところがあるのではないかと話しました。



▲阿仁マタギの家に残る黒谷山絵図 マタギ資料館所蔵



▲講演をする田口洋美氏

「ジビエをめぐる

現状と未来を語る」

出荷制限の続く野生鳥獣肉について、「南会津管内ではクマやシカについては基準値を超える個体は出ていないことから、出荷制限の部分解除を検討できるのではないか」との議題でデイスカッションが始まり、山形県小国町と長野県の事例が紹介されました。小国町では伝統的な熊まつりを再開するために署名運動や全頭検査を経て一部解除となったことが挙げられました。長野県ではシカ肉をジビエとして活用するために、狩猟現場での解体を禁止、衛生管理マニュアルを導入し、全頭検査を条件に一部解除となったことが挙げられた他、ジビエ自体にかかるコストや安定供給については課題があること等が報告されました。南会津町からは、出荷制限という現状のもとで、「駆除されるシカを少しでも活用したい」と、シカ革細工に取り組む活動が紹介されました。



▲パネルディスカッションの様子

また近年市街地への出没が懸念されているツキノワグマについてもデイスカッションが行われました。人間を恐れないクマが多くなっていることから、長野県ではツキノワグマ保護管理計画で積極的に春クマ猟を行う方針を打ち出された事例が紹介されました。また山形県で40年以上続けられている春クマ猟では、子持ちクマは捕獲しないなどの決まりを守りながら、猟師達自らがクマの生息頭数を調査しており、大量出没の年については捕獲頭数が多いにも関わらず、山中のクマの目撃数は変わらなかつたことなど貴重なデータが得られている事例も紹介されました。田口氏からは「福島県は原発事故による出荷制限が続いている。放射線量の検査体制についても課題はあるが、全

頭検査や処理施設の検討など解決できないわけではない。制限解除のための署名でも情報共有でも、我々東北の猟師達が連携して協力できる。福島県の皆さんは決して孤独ではない。諦めずに頑張りましょう」と力強くまとめ、参加者からは拍手が沸き起こりました。

現地視察

翌25日は大型バス3台に分乗して、ダムに沈んだ田子倉集落の狩場を見渡す展望ポイントで雪食地形による急峻な山々を観察し、対岸の雪溪にクマが現れるなど盛り上がりを見せました。

その後、阿仁の旅マタギが江戸後期に訪れた記録が残る叶津番所を視察しました。また、阿仁マタギと叶津番所それぞれの子孫が懇談し、遠い歴史に思いを馳せました。他にも、只見町朝日地区で春クマ猟をしていた渡部民夫氏から、かつて黒谷川上流で狩猟していた阿仁マタギの歴史が紹介され、参加者は興味深く聞き入っていました。



阿仁マタギが訪れた記録が残る叶津番所



田子倉湖を見渡す展望ポイント